

掛川市・大東町・大須賀町 合併シンポジウム
「1市2町の融和と発展に向けて」

大須賀会場 議事録

と き 平成15年8月2日(土)午後2時から4時
ところ 大須賀町中央公民館

プログラム

- 1 開 会
- 2 会長あいさつ
- 3 開催地町長あいさつ
- 4 基調講演 「市町村合併とまちづくり」
講師 静岡大学人文学部教授 小櫻義明氏
- 5 パネルディスカッション 「1市2町の融和と発展に向けて」
コーディネーター 小櫻義明教授
パネラー 榛村純一 掛川市長
大倉重信 大東町長
伊藤徳之 大須賀町長
- 6 質疑応答
- 7 閉 会

1 開会

司会 皆様、大変お待たせをいたしました。本日は、お忙しい中、またお暑い中をご来場くださりまして誠にありがとうございます。

それでは、ただいまから、掛川市・大東町・大須賀町任意合併協議会主催、合併シンポジウム「1市2町の融和と発展に向けて」を開催させていただきます。

私、本日の進行役を務めさせていただきます桑高いずみと申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

それでは、掛川市・大東町・大須賀町任意合併協議会会長でございます榛村純一掛川市長より皆様にごあいさつを申し上げます。

2 会長あいさつ

掛川市長 皆様、こんにちは。

土曜日の、そして久しぶりの天気になりましたので、お出かけにくい日よりだっただと思いますが、大勢の方にお集まりいただきまして、1市2町の任意合併協議会のシンポジウムに関心を寄せていただきありがとうございます。

ご案内のように、日本の国は江戸時代には300の諸侯と、それから7万2～3千の村から成り立っていたわけであります。この界限で言えば、横須賀城、掛川城がありますが、それを中心として町が出来て1町、そしてその周りに村々が1市2町の中だけで約100の村があったんですね。それが明治22年に大日本憲法が出来て、そしてもうちょっとまとまらなければ近代国家をつくれぬという明治の大合併がありました。これが明治22年のことです。それで、小笠郡というのが全部で4町31村にまとめられる基礎になりました。4町とは、掛川町、横須賀町、それから池新田町、堀之内町、これが4町ですね。あと31村にまとめられました。

それが明治22年からずっと続きまして、昭和28年から29年、新制中学を造るので、人口8,000人ぐらいにはまとまらなければいけないということから、いろいろで昭和の大合併という運動が起こりまして、掛川の場合は1町と周りの16村が一緒になりまして、昭和29年に掛川市が出来ました。そして、こちらの方もそれぞれ少しずつまとまって小笠郡は5町にまとまったわけですね。それで長らく、47～48年間、1市5町という小笠郡が、その明治の合併のときは4町31村、それが1市5町になって、今回本当は全くの一つにまとまるといいなと思ったんですが、浜岡町は原子力発電があるというようなこともあり、それから菊川・小笠の方も、今年、来年に合併すれば4万7000人でも、今は5万人以上ないと市になれないんですけれども、特例法によって4万7000人でも市になれるということになったものですから、じゃあ小笠・菊川は第1段階は俺たちだけでやらせてくれというご意見が強いようです。したがって、こちらは1市2町になったわけですが、本当は袋井も入れて小笠山全部まとめてエコパ市というようなものをつくった

らいいのにという意見もかなりありました。

そういうように、明治の大合併、昭和の大合併に対して、今回は平成の大合併と言います。その大きな流れと合併の目指すもの、それから、それが住民にどういう関係を持つかというようなことについては、この任意合併協議会の学識経験者の代表として、小櫻静岡大学教授にお願いしていますから、後ほど30分ですが、そういうことを巡っての基調講演をしていただきます。その基調講演に基づきまして、1市2町の首長と小櫻先生と会場の方々と、いろいろ議論を切り結んで、それで新しいまちをつくるということで、今日は有意義な会議にしたいということでございます。

私は、掛川の人たちには、今度大東・大須賀と一緒にすることは、掛川市は海岸がない。海岸とか砂地だとか、海岸線が2町だけでちょうど10キロあるわけですね。そういうところの幅のある砂地はさくさくして、おいしいスイカやイチゴやメロンが採れる。砂地農業というのは、人間の心もさくさくと割り切れると。掛川の方は、鉄道から北は本当にねばねばした土ばかりなんですね。ネットウと言うんですけれども、一度鍬に張りついたらなかなか土が取れないというところなんです。したがって、三本鍬が出来たんですね。そういうようなわけで、ねとねと民族。さくさくの人とねとねとの人と一緒にになると、一つの大きな人間性について、いいハイブリッドが出来るという期待をしております。

それから、海と山と新幹線、第一東名、第二東名、そういう東西の大動脈と海と山と、そういう掛け算の効果が非常に期待できると。後で申し上げますが、南北に長くなりますから、それを出来るだけ丸くする運動、道路をよくする、そういうことが課題になると思います。

それでは、今日の午後のひとときを我々の将来に向かって立派なまちをつくる、美しいまちをつくる、そして住みよい、誇りに思えるまちをつくる運動の第一歩になるようにご協力、ご参画をお願い申し上げます。

ありがとうございました。

3 開催地首長あいさつ

司会 続きまして、開催地でございます、伊藤徳之大須賀町長より皆様にごあいさつを申し上げます。

大須賀町長 皆さんこんにちは。

今日は久しぶりに夏らしい天候となりました。皆さんには、土曜日、何かとお忙しい中、このように大勢の皆様方にシンポジウムにご参加をいただきまして、ありがとうございました。

皆さんには合併のこと、いろいろ情報等で伝えているというふうに思っておりますが、まだまだ合併のことについて知らないことも多いのではないかというふうに思います。今日のこのシンポジウム等を通じまして、ぜひ皆様方にも合併のことにつきまして、思いを深めていただけたらというふうに思っております。

今、会長さんからもお話ございましたように、全国的に合併の関係につきましても、かなり熱意が上がってきたといえますが、それぞれの地域の方向性がだんだんと見えてきたというような状況ではないかというふうに思っております。私どものところも、ご案内の通り5月19日、第1回の任意合併協を開催してから毎月1回ということで、もう既に3回の任意協を開催させていただいて、だんだんいろいろなことが今協議の対象になり、決定をしているというような状況になってきております。

私どもの合併は、私は、私どもの行政の目的ではないというように考えております。住民の皆さんのさらに多様化、また高度化して行くニーズにどう対応して行くかというようなことから、将来に向けて皆様方へのサービスを確かなものとして行くためにも、この合併が手段として必要であろうというように考えているところでございます。21世紀、私どもに求められております地方の自主・自律、そのためにも体力や能力を身に付けて行く合併が必要ではないかというように考えているところであります。そんなところから、合併したらどうなるのではなく、合併してこうして行くんだ、合併したらこうなるというようなことを皆さんとともに、このようなシンポジウム等を通じまして考えて行きたいというふうに思っております。

今日が2回目のシンポジウムでございます。先週の土曜日、1週間前に掛川で開催をされ、本日が私どもの大須賀町、そして8月17日には大東町で3回目を開催して行くということで、だんだん盛り上がってくるのではないかとこのように思います。今日あたり、掛川市長さんや大東の大倉町長さんから、将来の大須賀、こうするというようなお話を聞かせていただけるかもしれないので、皆さんとともに期待をして行きたいというふうに思っております。

どうぞ、最後までご聴講いただきますことを切にお願い申し上げまして、一言開会に当たりましてのごあいさつとさせていただきます。

本日は誠にありがとうございました。

4 基調講演

司会 それでは、早速基調講演に移らせていただきますよう。

本日の基調講演は、「市町村合併とまちづくり」と題しまして、静岡大学人文学部経済学科教授でいらっしゃいます小櫻義明先生をお招きしております。

講演に先立ちまして、小櫻先生のご経歴を紹介させていただきます。

小櫻先生は、昭和20年生まれ、京都大学大学院を修了され、静岡大学人文学部講師、助教授を経られ、昭和63年から現職。専門分野は地域政策論でいらっしゃいます。静岡県総合研究機構外部研究員、静岡県自治研究所講師、静岡地域学会幹事、静岡未来づくりネットワーク代表幹事などでご活躍されておられます。また今回、この掛川市・大東町・大須賀町任意合併協議会委員として参画していただきまして、新市建設計画策定小委員会の委員長としてもお力添えをいただいで

おります。

先生は、地域に関する学際的研究動向と山間地での村おこしの実践を踏まえながら、人づくりという視点から地域づくりに取り組んでおられます。

それでは、小櫻先生を大きな拍手でお迎えいたしましょう。

小櫻先生、お願いいたします。

小櫻教授 皆さんこんにちは。

私、大須賀町にはよく来させてもらいまして、平均すると月一度ぐらいはここに来ているのではないかなというふうに思っているんですけども、まちづくり、地域づくりで非常に活発に頑張っておられる地域なんですけれども、その大須賀町を含めまして、掛川、大須賀、大東という1市2町の合併というものがまさに現実のものになってきたと。

それで、今日は合併に当たって、市長、町長、3人の方のお話をじっくりと聞こうというのが主な目的でありまして、私の話を、この合併に向けての3人の首長のお話をスムーズに進めて行くために、今の合併についての基本的な常識といえますか、合併ということを考える上において、なぜ合併なのか、その合併の意味とか目的は何なのかという、そういうことについて、あらかじめ簡単に整理をして皆さん方にお話を聞いていただくという、その趣旨で基調講演という形でやらせていただくものです。

まず、合併というとは何だという話ですけども、一番わかりやすいのは合併をして1市2町が一つになれば、まず町長2人、市長1人と3人の首長さんがいたのが1人になるんですよ。さらに、議会が一つになりますから、議員さんの数が大幅に減る。さらに、役所が一つになるわけですから、3人いた課長は1人でいいと。そういうのを考えますと、この合併で首長さんとか議員さんだとか、自治体の職員の人にとってみれば何のいいこともないと。だから、出来ることならやりたくないというのも、私は本音としてあるだろうと思うんですよ。

だけど、にもかかわらず、なぜ合併ということを提起して、それを積極的にやろうとされているのかという、この点について、住民の方は真剣に考えてもらいたいと思うんですね。自分たちのことは横に置いておいても、今の住民の暮らしがこれからどうなって行くのか、今の町の姿がこれからどうなって行くのか、そういうことを考えたときに、議員の身分だとか、あるいは市長、町長の立場だとかそういうものを、その個人的なものは横に置いておいて、真剣に将来の姿を考えたときに、合併という方向を選択しなくてはいけない、そういう決断をされているわけです。

なぜそういう決断をするに至ったのかという問題であります。その点で現在、言うまでもなく、今この1市2町だけではなくて、全国的に市町村合併というものが大規模に進められてきたこと。それを積極的に推進してお尻をたたっているのは政府であると。だから、全国の自治体の市町村の数を3,000幾つあるのを1,000前後に減らそう、3分の1に減らそうというのが目的で、今強力で押し進

められているんですね。

それでは、政府が積極的にやれ、やれと言っているから合併をするんだということになるんですけども、ただ政府が言っているからやるわけではない。なぜ政府がそんなことを言い出すようになったのか、この点がまず大事なポイントとしてあるわけですね。

これは、皆さんのお手元に配りましたレジュメの一番冒頭のところに、市町村合併のタイプ、要因、背景というものを図にまとめているんですけども、真ん中に自治体の対応というのがありまして、自治体が、すなわちこの1市2町が合併ということを選択するとき、一つは左側にあります政府がどういう政策をとっているのか。そして、右側にあります地域の実態、行政の現状、将来のまち、こういう右と左の両方をにらみながら合併という選択をするわけですけども、先ほど申しましたように、今日政府が積極的な合併促進政策というものを強力に遂行してきていると。

過去において、こういうことは2度あったんですね。これは先ほどの榛村会長のお話にもありましたように、一つは明治の初期の明治の大合併、それから戦後間もない時期の昭和の大合併、そして今は、それに続いて平成の大合併と、そういうことが展開されてきているんです。そういう意味でも、明治以降の日本の歴史の中で、過去2度あった、今日3回目だと、そういう大きな出来事というものが今起きています。

ただ私は、明治の大合併と昭和の大合併と、それから今日の平成の大合併は全く違うと思います。詳しいことは時間の関係で申し上げられませんが、ごく簡単に言いますと、明治の大合併、昭和の大合併も国家、日本の中央政府、国が中心になって、先頭に立って、日本という国をアメリカ、ヨーロッパに追いつけ、追い越せ、近代化、工業化、あるいは富国強兵、戦後であれば戦後復興、高度成長、そういう形で、国が先頭になって日本の経済を発展させて行く。そのために、いわば地域に密着した行政組織というものをどう整備するかと、そういう趣旨でやられたのが大合併です。だから、その合併の結果、中央集権的な行財政制度というものが構築され、さらに強化をされてきた。そういう意味では、明治、昭和の大合併というのは中央集権のための大合併であったと言ってもおかしくないものだったと思います。

ところが、今日の平成の大合併というのは全く違うんですね。むしろ中央集権ではなくて、地方分権のための合併であると。言葉を換えて言うと、地方分権を推し進めるために、その分権、すなわち国や県が持っていた権限を市町村に降ろして行く。その権限をちゃんと受け止めて行く。それをうまく使いこなして行く。そういう基本自治体、市町村をつくる。すなわち、分権の受け皿作りとしての合併なんですね。そういう意味でも、中央集権のための大合併なのか、地方分権のための大合併なのかという、この点が明治、昭和と今日の平成の大合併の根本的に違うところなんですね。

そこで、じゃあ地方分権とは何かというと、地方分権というのはいわば地方自治体のもっとも自由に使うお金、もっともいろいろな自由に権限を持って行政をしたい、そういう地方分権であれば、ずっと戦前から地方自治体というのは地方分権をしてくれ、してくれという形で要求をし続けてきたんですね。だけど、実際はそうは行かなかった。むしろ中央集権というのが強まるばかりだった。

ところが、今日急に地方分権というものが具体化して現実化してきた。それは、自治体が長らく要求していたことが実現したのかということ、私は必ずしもそうでもないと思っています。今日の地方分権というのは国が言い出したものです。国の都合下で提起をされたものです。別の言葉で言うと、国の形を変えて行く、そのための分権改革の一環として平成の大合併というものが提起をされたきたんですね。

では、なぜ国の形を変えて行くのかということ、一つは日本的な理由と、それから世界的な大きな流れという二つ要因があるんですけども、日本の流れで言いますと、合併、分権というのが提起されてきたのは1990年前後なんですね。そのころというのは平成の好景気で、日本は名実とも二つの石油危機を克服して世界の経済大国になった、先進国になったと。ジャパン・アズ・ナンバーワンだと。アメリカは落ち込んできたけれども、日本はアメリカに替わって、あるいはアメリカと並んで、いわば世界に対していろいろな形で貢献、協力すべきであるという、そういう議論が出てきたんですね。日本は経済大国になった、先進国になったということは、明治以来、日本がアメリカ、ヨーロッパに追いつけ、追い越せという、そういう国家的目標がとうとう実現したと。それが実現したその先は、日本という国はどういう方向を目指すべきなのか。そのときに提起された考え方が二つありまして、一つは国際貢献です。

すなわち、日本はこんなに経済大国になった。日本の物と金が世界中に行き渡ってきた。ところが、経済は一流になったのに、生活は二流、政治は三流という形で一向に国際政治においてリーダーシップをとれるような政治家がとんと誕生しない。なぜかということ、国会議員がみんな自分の選挙区のことばかり考えて、そういう政治をやっているからそうだと。だから国会議員というのは、あるいは中央政府の官僚というのは、日本という国が世界に向かって何をなすべきなのか。世界の中で日本という国の国益をどう考え、守って行くのか。そのことを考えることに専念すべきだと。そのために、選挙区にかかわるさまざまな事柄については、地方分権で全部自治体に任せちゃえ。そういう、いわば日本という国が国際貢献という形で、世界にこれからもっとも羽ばたくべきだと、そのために日本の政府、中央政府として世界に向かって安全保障の問題だとか、あるいは外交の問題、あるいは地球環境上のさまざまな問題、貧困や戦争の問題、そういう国際的な問題についてももっとも貢献すべきである。そういう趣旨から、地方分権をやるべきだという考え方が出てきたんですね。

もう一つの考え方は、いや、日本は経済大国になったといっても、生活福祉で

はまだまだ劣っているのではないかと。だから、これからは福祉大国、生活福祉にもっと重点を置くべきだと。生活福祉というのを中央集権で国がああせい、こうせいという形で指示・命令をするのではなくて、住民に身近な自治体のところにもっと行政の権限を降ろして行って、住民の身近なところで行政施策というものをやらせるべきだと。そのために地方分権をやるべきだということですね。

そういう意味では、日本という国が21世紀に向かって国際貢献に重点を置いた国づくりをするのか、あるいは生活福祉に重点を置いた国づくりをするのか。その二つの国家ビジョン、国家像というものが両方提起されてきて、その両方から同じように地方分権が必要だということが提起されてきたんですね。その結果、1993年に衆議院、参議院において地方分権を推進するという国会の決議がなされたわけです。そのときに全会一致、自民党から共産党に至るまで全員一致で地方分権が決議されたんです。日本の国会史上において、地方分権というものが決議されたのは初めてです。

その後、地方分権基本法という法律が出来てきて、分権を具体化するために地方分権推進委員会というものが設置されて、分権の中身について議論され、実施をされてくるという動きになってきたわけです。

その経過については詳しく申し上げませんが、とにかく日本という国が、これからどういう方向をたどるべきかという、その過程の中で地方分権というものが提起をされてきたんですね。ただその時に、国際貢献に重点を置くか生活福祉に重点を置くかというのは、分権についての考え方では若干ちょっと違うんですね。というのは、国際貢献に重点を置くというのは、国として、外に向かってもっともっとやるべきことがあると。地方は地方で自分たちの行政サービスについては、その地域の負担において、責任においてなされるべきだということですね。そういう意味でも、国に支援をしてもらわない、歳入面において国から自立をする地域をつくりなさい、自治体をつくりなさいという、そういう意味では地方分権といっても、どちらかという歳入面に重点を置いた分権論である。

ところが、生活福祉に重点を置く分権論になってくると、むしろ歳出面、すなわち生活福祉の行政において、もっともっと自治体が自由にお金を使う、もっといろいろな施策をやって行く。そういう意味でも、歳出面において、すなわちもっと自由にお金を使わせてくれと、そういうところに重点を置いた分権論であるわけですね。

歳入面に重点を置くと、地域の自立。そうすると、今の自治体の規模で自立できるのかという、そこら辺で合併というものがストレートに出てくるわけですが、歳出面に重点を置いた分権論というのは、簡単に言うと、もっと自由に金を使わせろ。じゃあお金はどこから取ってくるのかということ、それは国がちゃんと今までどおり面倒見てくれればいいんだということですね。そういう形で、必ずしも合併は地域の自立にはつながらない。そういう意味では、この二つの分権論というのは必ずしも同じではなくて、むしろ具体的な合併の話になると、か

なり考え方が違うものです。

ところが、日本がこれからどういう方向に向かうべきかという二つの像の違いは、その後消し飛んでくるんです。なぜかという、すなわちバブルが崩壊をして、日本経済がどんどん奈落の底に落ち込んで行って、そして政府はこれは大変だ、すなわちあんなに強かった経済が、日本の企業がとんだめになって行く。それで、いわば公共事業をぼんぼんやって景気政策をやったけれども一向によくない。そして、国家財政はますます赤字が累積して、まさに破綻の危機に瀕する。経済は一向によくない。むしろ先進国の中では、逆にビリの方の経済力、競争力というのが落ち込んでいるわけです。

そういう状況になってくると、国際貢献どころではない。生活福祉どころではない。どうやって日本経済を立ち直らせるのか。もっと言うと、日本の人たちの働く場所をどう確保するのか。どうやって収入、所得というものを保障して行くのか、これが大きな問題になってくるんです。そうすると、国は深刻な財政危機のもとで、もう地方に対して、これ以上いろいろな形で面倒を見るわけにも行かない。地方交付税あるいは補助金だとか、いろいろな形で自治体のお尻をたたいて事業をやらせて、尻ぬぐいを政府がしていたのが、もうそういうことが出来なくなってくるわけですね。

そういう事態になってきて、地方自治体の関係者のところで、もうこれ以上国の財政状況を見てみると、とてもじゃないけれども国からお金を出してもらって、地域で、自治体でいろいろな事業をやるということはもう難しいと。そういう危機感がすごく広まったんですよね。そして、今の合併特例法、法律の枠内であれば、この特例法の期限内に合併をすれば、交付税だとか特例債の発行だとか、いろいろな面で、いわば国が面倒を見てくれる最後の仕組み、そういうアメというものがここで用意されている、準備されている。だから、地域自治体としては、地域でやらなければいけないいろいろな事業だとかいろいろな課題がたくさんあります。それを、地域の自分たちの力だけ、すなわちその地域の住民の負担だけでそれらをやり抜くということは極めて困難になった。だから、この合併特例法の期限内に、アメがしゃぶれるうちに何とかしゃぶろうという形で全国の自治体が一斉に合併に向かって動き始めたわけです。

ただその中で、うちのところはやるべきことは全部やっているよと。だから、ことさらそんなにやらなくてもいい、困ってもいいと、そういうごく少数の自治体は合併しない宣言みたいなことをやって、俺たちで何とかやると言っているんですけれども、大部分のまちというのはそういうわけには行かない。それが、実はこの合併の背景として、本来の本質としてあるわけですね。それと、今日合併をするのは何のためかという、国にそんなに面倒を見てもらわないで、国に余り頼り、依存、甘えたりしないで、自分たちでどう自立して行くか、地域の自立です。

それは同時に、もう一つ国際的な要因として、国境という垣根がどんどん小さ

くなって、人、物、金というものが自由に出入りするようになってきた。そうなるようになってくると、地域というものが今まで国、国境という垣根を高くして、その中で国が守ってくれていたけれども、もう国境という垣根が小さくなってくると、国は守ってくれない、守ってやれなくなってくる。だから、世界各国で、先進国から、旧社会主義国から、発展途上国から含めてそういうことになってきたから、むしろ国を単位にして発展をすとか守るというのではなくて、むしろ国の中の地域単位でそれぞれ自分の自力で、自助努力で、自己責任で国際的な地域間競争の中で頑張りなさいという、そういう動きになってきていますね。だからそういう意味では、地方分権というのは日本だけではなくて、世界各地で同じような動きというものが起きてきています。

例えば、福祉で有名なスウェーデンあたりも、デンマークもそうですけれども、これからは中央集権、中央政府主導型で福祉というのはやっていけない。だから、権限をもっともっと自治体に移譲して、だから地方自治体が、地方政府が主体になって福祉というものを継続して行く。そのために、大規模な合併というものが、デンマークだとかスウェーデンだとか、ああいう国々においても行われてきている。そういう意味では、地域を単位にして、地域でそれぞれの責任を持ったまちをつくって行きなさいと、そういう流れになってきています。

それと、地域で自立をしようと思ったら、小さな地域だけで自立できるかと。だから、小さなまちが集まって、さらに大きなまちも一緒になって、都市と農村、山村、漁村、そういうものがお互いに手を取り合って、この地域は頑張っていくてはいけない。自立を目指さなくてははいけない。特に、今は産業空洞化で世界の物づくりの拠点がどんどんアジア、とりわけ中国に移っていますよね。それと安い人件費、安いコストだけで見れば、そういうところは全部中国に移ってしまった。そうすると、そういうところでは作れないもの、そういう経済というものを地域で育てなければいけない。そうすると、頭を使う仕事、知識というものが非常に重要になってくるんですね。

そういう頭を使う仕事、あるいは知識とか情報とか、そういうものを収集し、集約し、新しい知識、情報を生み出す機能というものは、都市というものの機能に大きく依存している。すなわち、そこにおける大学だとか、いろいろな研究機関だとか、あるいは図書館だとか、そういう人の頭、知識、能力、それを高めるような機能という、そういう都市、より高次の都市機能が集積した地域、そういうものがこれから国際的な競争の中で生き残って行くだろうと思います。そうすると、周辺の農山漁村というものも、そういう都市と一緒に生きて残り、発展というものを目指さなくてははいけないと。

そうなるようになってくると、すぐ頭に浮かんでくるのが、そんなことをすればみんな都市に吸い取られてしまう。ここで言うと、大東・大須賀という小さなまちも、掛川という都市と一緒になれば、掛川に全部吸い取られるのではないかという懸念をお持ちの方が多いと思いますけれども、私はそれは高度成長期の日本がアメリ

力、ヨーロッパの後追い、物まねをやっていた時代はそうだったけれども、これから全く新しい物づくり、知識とか情報とかそういうものを新しく作り出して世界に発信する、そういう都市をつくらうと思ったら、都市だけではつukれないんです。むしろそういう頭を使う仕事、知識をいろいろ活用する仕事にとってみれば、一番大切なのは快適な生活環境であり、それを支える豊かな自然環境、そしてまた、そこで暮らして、新鮮で安全な農林水産物というものがどう手に入るか。あるいは、そういうものと日常的な接触、交流というものがどれだけなされているのかという、それこそむしろ新しい知識産業、情報産業の一つの発展の基盤になるんですね。

だから、東京だとか横浜とか、名古屋もそうですけれども、大都市において、いずれも再開発で大都市のど真ん中に膨大なお金をかけて公園を造ったり、公民館を造ったり、博物館を造ったり、図書館を造ったり、そんなことを一生懸命やっているのはなぜかという、そういう頭を使う、知識を使う仕事の人にとってみれば、そういう快適な生活環境というものをちゃんと整備をする。そのことによって、非常に優秀な人材というものが集まってくるんだと。その中で新しい成長産業が出来るんだと、そういう時代だからですよね。

でも、そういう快適な生活環境であれば、大都市のど真ん中に無理して人工的な物を造るよりは、こういう地方都市で豊かな自然がたくさんある。その中で、農業、林業、水産業というものがまだ残って元気だ。そういう地域に持ってきた方が、はるかにより良いものが出来る。特に、今インターネットが非常に発達していますから、世界のいろいろな情報というのは別に大都市にいなくても、ど真ん中にいなくても、地方においても容易にアクセスできる、収集できる、さらにそこから発信も出来る。その意味でも、私はこれからの時代というのを都市と農村との格差、距離というのは開いて行くのではなくて、むしろそれが縮まって行く、そういう時代だと思っうんですね。

だからそういう意味でも、1市2町でこれからまちづくりをするときに、掛川という都市と大東・大須賀といういわば農村、田園都市というものがうまく結びついて、お互いに連携・協力をしながら、そのときもより高次の都市機能というものを掛川に集中するというよりは、例えば大東町に東京女子医科大学の看護学部が出来たというんですね。そういう小笠山周辺の豊かな自然環境のところに学術研究、そういう機関というものを十分立地できるんですね。だから、あとは交通、道路、そういうアクセスをしっかりと、そういうところでも簡単に掛川、新幹線駅に行ける、あるいは掛川インターにも行ける。その中で、東京に日帰りできる。そこでいろいろな新しい情報、フェイス・トゥー・フェイスの直接会って話さないといけないような情報は、簡単に東京への日帰りで入手できる。そういう意味でも、私はこういう1市2町のまちというのは、地方において世界の最先端を走ることが出来るような、そういう田園都市というものをこの地域において実現して行く、そういうチャンスだと思っうんですね。

ただ私は、合併というのはあくまでも道具であり、手段であります。合併したから、放っておいたらそのままなっていくのではないんです。放っておいたら掛川に、逆に言えば吸い取られて行く危険性だってある。そうはならないために、どういうまちづくりをお互いにして行くのか。また、掛川に吸収されて行くようであれば、周辺が衰退するようであれば、掛川というまち自体の発展もそれ以上は望めない。だから、いわば一極集中ではなくて、多中心、多角型、連携型の新しいまちづくりというものをどうそこに組み込んで行くか。

そして、もう一つ大切なことは、これからの成長産業、21世紀の成長産業は、国際的にもすぐれた競争力を持っている産業、企業だけではなくて、国際化しようにも国際化できない産業、企業、すなわちそれは、その地域に暮らしている住民の生活に密着した産業です。特に、高齢社会を迎えると高齢者が増えてくる。それは逆に言うと、高齢者に対する福祉のニーズ、高齢者の生活をより満足させるニーズというものがเพิ่มด้วยて、そのニーズを満足させるようなさまざまな産業、すなわち福祉ビジネス、福祉産業、医療産業、さらにすぐれた人材をこの地域で育てる教育産業、そういう地域の生活に密着し、直結した産業というものを、この地域でどう育てて行くか、それもやはり大きな課題になってくると思うんですね。

そういう意味では、私は、この地域というものが人間として人間らしく暮らせる、スローライフということが今盛んに叫ばれていますがけれども、そういう人間らしい暮らしがこの地域で出来て行く。その人間らしい暮らしが出来るところですぐれた人材も育ってくる。すぐれた人たちがそこで放っておいても集まってくる。集まってくることによって、新しいものがそこでどんどん生まれてくるんですね。そういうまちというものがここでつくられれば、そこで世界に発信できる、世界に先駆ける、世界の最高水準のものもこの地域の中で造って行くことが十分に可能であると思うんです。そういう意味で私は、この1市2町の合併というのは一つの始まりであって、この枠組みの中でどういうまちをつくって行くかという、これからの市民の、皆さん方の自助努力、どれだけ頑張るか、そこにかかっていると思うんです。

そういう意味では、行政というものはそれを側面から支援するものです。ただ、支援するといっても、それだけの高度な能力というもの、あるいはノウハウというものを持った人たちが支援をしなければいけない。そういう意味で、いわば1市2町が一つになることによって、全体としての職員、スタッフの数が増えてくる。その中で、例えば農業振興だとか、あるいは海岸線をどう活用するだとか、あるいは山間部をどう活用するだとか、それを情報産業とどうつなげるかだとか、そういう非常に高次で専門的なことを考えついて、そして住民を一生懸命支援して行く、そういうすぐれたスタッフが、この1市2町が一緒になることによって、新しい市役所の中にそういう職員というものも登場してくるだろうと。そういうまちづくりというものをぜひ目指していただきたいという具合に思っています。

ということで、ちょうど時間になりましたので、以上で私の話は終わらせていただいて、後は本番であります市長、町長のパネルディスカッションのところで、この1市2町のまちの将来の展望について大いに語っていただきたいと思います。以上で私の話は終わらせていただきます。

住民意向調査結果報告

司会 小櫻先生、どうもありがとうございました。

それでは、続きましてパネルディスカッションに移らせていただきますが、舞台の準備を行いますので、少々お時間をいただきたいと存じます。

この時間を利用して、6月に実施いたしました住民意向調査結果速報についてご紹介します。お渡ししました資料の中に調査結果速報がございますので、ご覧ください。

この調査は、住民の意向を把握し、新都市の建設計画などに反映して行くためのものがございます。対象は、1市2町にお住まいの20歳以上の方から無作為に抽出した4,500人の皆様に郵送で配布、そして回収し、全体の42.16%に当たる1,897人の方から回答をいただきました。

回答されました方の男女比は、男性が42.7%、女性が55.6%です。20代から80代以上まで、幅広く回答をいただくことが出来ました。

主な結果をご紹介させていただきます。

開きまして問6、合併への関心については「大いに関心がある」「少し関心がある」両方を含めて、約7割の方が合併に関心があることが伺えます。問7、合併で期待する効果としては「役所の人件費など経費が節減できる」が最も多く、続いて「今までと違った発想のまちづくりが出来る」が上位となっております。問8、合併への心配では「税金や使用料などの住民負担が増えないか」が最も多く、続いて「中心部と周辺部に格差が生じないか」が上位となっております。問9は、現在の行政サービスに関しての満足度が21の分野で示されております。グラフの左側から満足、右側から不満となっております。問10、新都市のまちづくりに積極的に活用すべきものは「福祉・介護施設のネットワーク」が最も多く、続いて「1市2町を結ぶ幹線道路」などが上位となっております。問11、新都市の望ましい姿では「保健・医療・福祉の充実したまち」が最も多く、次いで「自然環境の豊かなまち」が上位となっております。問12、優先的に取り組むべき施策では「医療や福祉の充実を図ること」「バス、鉄道等の利便性を図ること」、「行政組織の合理化や財政の健全化を図ること」が上位となっております。

なお、この住民意向調査結果速報については、8月中旬に発行されます「合併協議会だより」の中でも皆様にお知らせして行く予定でございます。お願いいたします。

そして、こちらの参加者アンケート、こちらの方もどうぞ皆様、会が終了するまでにお書きくださいまして、受付の箱にご投函をお願いいたします。よろしく

お願い申し上げます。

5 パネルディスカッション

それでは、お待たせをいたしました。ただいまからパネルディスカッションに入らせていただきます。

初めに、コーディネーターとパネラーの皆様をご紹介させていただきます。

コーディネーターは、基調講演に引き続きまして、静岡大学教授でいらっしゃいます小櫻先生にお務めいただきます。お願いいたします。

そして、パネラーの皆様、大倉重信大東町長でいらっしゃいます。

榛村純一掛川市長でございます。

そして、伊藤徳之大須賀町長でいらっしゃいます。

それでは、これからの進行は、コーディネーターの小櫻先生にお願い申し上げます。よろしくお願いいたします。

小櫻教授 それでは、早速パネルディスカッションに入りたいと思います。

まず冒頭に、本日のパネルディスカッションの大きな道筋、順序立てということについてご紹介しておきます。

まず最初に、この1市2町の町長、市長さんにあいさつを兼ねてシンポジウムに対する期待及びどういう姿勢でということについて軽く触れていただきまして、本番としまして、3本の柱について、それぞれご意見を述べていただきたいと思っております。

第1の柱は、この1市2町の合併の必要性という、あるいはそこにおけるさまざまな課題解決の方向性ということについてお話をさせていただきます。

2番目の柱が、それぞれ1市2町の持つ資源と魅力についてお話をさせていただきますけれども、この内容につきましては、まずそれぞれのおらがまち、こういういわば資源があり、こういう魅力があるんだという、おらがまちの自慢のお話と同時に、おらがまち以外の、いわば自分のまち以外の1市2町の他のまちが持っている資源と魅力、それと我がまちというものをどういう形でつなげて行って、より魅力度を高めて行くかと、そういうことについてお話をいただきまして、3番目の柱として、それではこれからどういうまちをつくって行くのかという、新しい新市のビジョン、その中でいわば1市2町の融合、調和、そして全体としての魅力的なまちづくりという、そういうことについてお話をいただきます。

一応、その3本の柱についてそれぞれお話をいただいた後、最後に、そこで話せなかった、あるいは物足りなかった、あるいはぜひ付け加えたいという、あるいは全体のまとめという、そういうものを含めまして、総括としてそれぞれまたご発言をいただきます。

その上で、会場の皆さん方から、ぜひこの1市2町の首長さんにこういうことを聞いてみたい、こういうことについてどう考えているのかということですね。あるいは自分はこう思っているんだけど、そういうことについて、フロアの方

から発言をいただきまして、そしてそれについて、最後に1市2町の町長さん、市長さんから、再度それについての回答、コメントということもお伺いしたいと思います。

それでは最初に、簡単なごあいさつを兼ねて、大東町長大倉さんから、まずお願いしたいと思います。

大東町長 どうも皆さんご苦労さまでございます。

ただいまご紹介いただきました隣町の大倉でございます。今日は、1市2町の2回目のシンポジウムということで、大須賀町さんにお邪魔をしているところでございます。

あいさつに入る前に、今日私は、このホールの入り口に来ましたら、大須賀町出身の笠洋正好さんですか、大相撲名古屋場所で三段目で見事優勝されたということで、過日の新聞にも伊藤町長さんとの対話がありましたけれども、うちのまちではこのことにおいて、1市2町の合併の枠組みの進展と、笠洋さんが関取になるのとどっちが早いかという話題も今出ているところでございまして、これもうれしい話題ではないかなというふうに思っているところでございます。

まず最初に、私は、この1市2町の皆さんが、それぞれの地域の魅力とか資源を再発見していただいて、新しい市になったときに、それをまず活用していただきたい、こんなふうに考えております。

それから、二つ目といたしましては、1市2町の魅力ある施設なりがそれぞれ、例えば大須賀の方々が大東のこと、あるいは掛川のことに関心を持っていましたら、まず自らが自然景観とかそういったところを尋ねて行って、それぞれを知っていただきたいなと思っております。

それから三つ目には、その上で、合併前でありまして、それぞれの組織とか、あるいは団体がございましたならば、お互いに交流をし合って、相互にまず理解を深めるような作業もしていただきたいな、こんなことをまず申し上げておきます。

以上です。

小櫻教授 ありがとうございます。

それでは引き続き、掛川市長、よろしく申し上げます。

掛川市長 私は、大須賀町は子供のころから、掛川西高のときに大須賀町の友達がたくさんいたものですから、しょっちゅうお互いに行き来してましたから、余りよそのまちだという感じを持っていません。余り個人の名前を言っても申し訳ない、あるいは差しさわりのあるかもしれませんが、小林さんというお寿司屋さんがありまして、あそこの主人が、私たちが子供のころはター君、ター君と言っていたんですが、小林タダシ君が、もう亡くなったので残念ですけども、彼は野球の選手でセカンドを守ってまして、私と掛西で机を並べて、野球ばかりやっていたので勉強は出来なかったんですけども。それで、私がいつもカンニングして、お前さんは野球で掛西の力を付けているんだから、いつも試験の時は出

来るだけ横から見えるようにしてあげたんですね。ですから、卒業してから後大須賀へ、私が市長になってから遊びに来たときに、お寿司屋へ行くと、いつもお前のおかげで助かったからお寿司をただでやると言ってもらったので、亡くなって本当に残念ですが。

それから、高橋君という人がいました。これは非常に出来る男で、三井金属という会社の三井系の金属鉱山の重役までなったりしたんですね。この人はもうちょっと郷土として活用すべきだなと思っていたんですけども、なかなか結びつかなかったんですが。そのほか、桑原ヨシノブ君という、これまた出来る男で、これはどこかへ引っ越しちゃったそうですけれども、そういう人とか、いろいろ大勢の人がパッパッパッと思い浮かぶので、非常に親しい感じを持っています。

それから、大石高さんという町長さん、今日はお見えでないかな、4期16年やられたので、私はいつもそのうちの、大石さんが50年に当選しましたから、2年私は遅れていますけれども、後の14年は本当に一緒にいろいろなことを協議したり、それから新幹線の駅の負担金をお願いに来たときも、「ドニンだでしょうがないな」と、ドニンという言葉が使われたんですけども、負担するよと。そのかわり、「こんなになって行かにかいかな道を早く真っすぐにしろ」と、こういうことを言われました。彼自身は、最初の選挙は物すごい激しい選挙だったんですね。4人だか出たと思いますけれども、その中で私が注目したのは、最初に出たときに掛川市と合併することが我がまちの行く道だということを行ったんですね、昭和50年に既に。ところが、当選して1期たったところで、2期目の公約なんかにはそれを言わなくなっちゃったんです。それで、どうして言わないんですかと言ったら、しばらくは私のまちだけで行く方がいいと思っているからというようなことを言いました。確かにそうだと私も思いました。

そういうような関係で、いつも大須賀町のことは注目して、あるいは親しく思っています。最近では、私はサンサンファーム、あるいは赤ずきんちゃんというお付き合いがありまして、この間も赤ずきんちゃんの若夫婦2人一緒にアメリカへ行って来たんですけども、ああいう物すごい観光農業というか、ああいうものが出来たというのは素晴らしいなと思います。

もう一つ、極めて人間として傑出したというか、珍しい人が赤堀養鶏、赤堀社長ですね。私はあの方と非常に親しくしてしまして、大須賀町にとってはちょっと外れた人かもしれませんけれども、あれは傑物ですね。

そういうようなことで、そういう人材というものが、掛川にはないような人材がいっぱいいるんですね。これはやはり海岸線、太平洋に向かって海岸線と砂地があって、さくさくしているからというようなことではないかと思っているんですね。

それから、野菜市場を掛川で、1市5町の青果市場をやっていますが、その専務を平松さんがやっていますので、そういうことで、また野菜のことでもあるということでもあります。

小櫻教授 はい、ありがとうございました。

それでは、大須賀の伊藤町長、お願いします。

大須賀町長 皆さん、ご苦労さまです。

先ほども申し上げましたように、今日は皆さんとともに、こういうまちをつくって行くんだというようなことをテーマにお話をさせていただきたいというように思っております。

地方分権の中で、地方が自主・自立して自分のところのことについては国が言うままではなく、自分たち自身で考えて行く、問題の解決をして行く。それには、もっともっと能力を高めたり、また体力を付けたりして行かなければならないというふうに思っております。

今回、私どものまちにも特例法というような一つのバックを持って合併が促進される。これは、大須賀町がさらに今後発展をして行くときのいいチャンスだというふうにとらえております。そんな意味で、すぐ合併というと掛川に取り込まれてしまうのではないかというような若干悲観的な見方もあるわけですが、そうではなくして、大須賀町が今いいチャンスを迎えているというような意味合いで、皆さんとともに今後とも議論をして行きたいというように思っておりますので、どうぞよろしくお願いします。

今日は、先ほども申し上げた通り、掛川の市長さん、大東の大倉町長さんから、大須賀の将来をこうしてやるというような話も言っていただければ大変盛り上がるのではないかというふうに思っておりますので、皆さんとともに期待をして行きたいと思っております。

どうぞよろしくお願いします。

小櫻教授 はい、ありがとうございました。

それでは、一応冒頭の簡単なごあいさつは終わりました、いよいよ本題に入りたいと思います。

第1の柱であります合併の必要性、問題解決の方向性、そういうことにつきまして、これも順番はさっきと同じように、まず大東町長、大倉さんから始めたいと思います。よろしくお願いします。

大東町長 それでは、限られた時間でございますので、若干申し上げてみたいと思います。

これは私の考え方、皆さん方と同じだと思いますけれども、この1世紀を振り返ってみますと、明治以降非常に人口が爆発的に増加してきております。そうして、地方から都市への人口流入によりまして、極端な高度成長時代が到来しました。そして、徒歩や自転車の時代から車社会というふうに変貌してきたところでございます。これは皆様方もご承知の通りでございます。

そうしますと、現代の車社会は、そのかわりも自転車の時代まではせいぜい1日の個人の行動半径が5キロぐらいであったというふうに理解しておりますけれども、それが極端に10倍ぐらいに拡大してきております。そして、生活とか経

済の成長とともに、それぞれの生活が豊かになりました。

また一方では、少子・高齢化の時代の到来とともに、また高齢化率も非常に上昇してきているということが顕著にあらわれてきております。そして反面、出生率が年々低下もしてきております。その上、非常に国の財政もなかなか厳しいというような現在の現況であるわけでございます。こうなってきますと、なかなか国がこれから思うように立ち入っていかなくなるのではないかというようなことも言われております。将来の時代を担って行くためには、財政の健全化をまず図ることが急務となってきたるわけでございます。

このような課題を抱えた中で、20世紀は、日本はアメリカ型の浪費社会からヨーロッパ型の循環社会、いわゆる地方成熟社会へ移行して行くとも言われております。今までと根本的に違う時代が到来し、20世紀の延長線ではどうしても済まない時代になってきております。一方、グローバル化の中で、大変大交流時代、大競争時代が始まりつつあります。これはこの田舎の我々も実感をしているところでございます。地方の分権の時代から中央の集権の時代、これは小櫻先生の基調講演にもございましたように、行政も足腰を強くして行かなければなりません。

私は、このような時代背景の中で、行政規模は行政効率が一番良いと言われております15万から20万人規模に再編すべきというふうに常々訴えてまいりました。こういうことになると、市長からも話がございましたように、1市4町が理想であるかなというふうに思ってきておりましたけれども、なかなかそれが実現路線としては難しいような状況になりまして、まずはそうした中で1市2町の合併を実現して行く、こんなふうに考えているのが今日の姿勢でございます。

以上でございます。

小櫻教授 ありがとうございます。

生活圏、行動圏の拡大、あるいは少子・高齢化、ニーズの高度化、そのもとでの適正な行政規模という、本来私が基調講演の中で触れねばならなかったことまで触れていただきましてありがとうございます。

それでは掛川市長、お願いします。

掛川市長 私は、わかりやすく合併はなぜ必要かとか、合併した方がいいというようなことについて五つ言っているんですね。

五つとは何かと言いますと、一つは、小櫻先生もおっしゃったように、これからは地域が自立して、それで縦割り社会が悪いから市町村がもっと大きくなって、それで人材も、霞ヶ関へ優秀な人材が入るのではなくて、地方で大きくなった自治体にいい人材が入るようにして、分権、自立を進めなければいけない。それから、日本の国は国・県・市町村という3段階でやっていますけれども、市町村が大きくなって、県は限りなく小さくなって行くと、こういう方向。地方自治体には県と市町村とありますけれども、市町村部分を大きくして行く必要があると、そういうのが地方分権、地域自立としての合併。

2番目は、行政改革としての市町村合併。これは市町村が小さいと、無理、無

駄、むらがあるということもあるし、その逆に集中するといいいことがあると思います。そういう意味で、行政改革としての市町村合併。

3番目は、大倉町長さんもおっしゃったように、少子化とか高齢化とか、いろいろこれからは社会がお互いに面倒を見合う社会になるわけですね。それを保険型社会と言うわけですが、保険型社会というのは支持人口が多いほどいいですね。母集団が多いほど掛け金が少なくて、得るものは、不幸にして助けられたい人は安心してやってもらえる。国民健康保険も大きい方がいいですね。そういう意味であります。

4番目が、これが極めて短兵急な話ですけれども、国がアメとムチをよこしたわけですよ。市町村合併をなささいという時に、アメとは何かというと、特例債というのを認めますよ。特別の借金を認めますよと。それで、例えば掛川へ行く道を早く造りなさい、そのときにはお金を借りていいですよと。その借りたお金は返さなければいけませんけれども、返すとき、7割は政府が返してあげますよと、こういう制度を作ったんですね。それには全国の市町村長が、これは魅力だなと思ったんです。7割返してくれる借金と言ったら、みんなやりますよね。その他に、交付税も合併しても減らないようにしますよとか、いろいろアメを出した。

それから、今度はムチとしては、自分で小さく頑張っているとだんだん交付税が減らされて行って成り立たなくなりますよというムチですね。そういうことがあったので、合併というものが一遍にブームになったと。そういうわけで、住民・市民の人がちょっと置いてきぼりを食っちゃった、だからこういうシンポジウムをこれから繁くやって行かなければいけない。説明会を繁くやって行かなければいけない、こういうことです。

最後が、そういうことを踏まえてくると、それではこういう枠組みで行こうとなったら、新しい都市のビジョンを作る新都市建設としての市町村合併と、この五つがあると思います。

私は、小櫻先生がおっしゃったことを地元市長的に解説して分けるとそういうことではないかということでもあります。

小櫻教授 ありがとうございます。

五つにわかりやすく整理をしていただきました。

それでは大須賀町長、よろしくお願いします。

大須賀町長 3番目ですと、大体もう皆さん合併の必要性等について触れられております。私もダブるところがあるかもしれませんが、お願いします。

まず、日常生活圏、先の合併から50年、もう住民の皆さんは一つ、二つまちを越えてもお買い物等に行かれるということです。私どもの役場の前の相良大須賀線も合併当時は砂利道でしたが、現在はこんな素晴らしい舗装になって、5分か10分走ればどこかの役所に到着するというので、これではもう役所の数が少しくたくさんあり過ぎるのではないかと。それが行政効率にかかわってきているという

ように思っております。

そんな生活圏の拡大がありましたので、合併もそれらに向けて市町村が進むべきではないか。例えて言うならば、もう私どもの身の回りに50年前の日常生活に使うようなものは何一つないわけなんです、ただ一つあるのが市町村境があるわけです。もう住民の皆さんはその境を飛び越えているということですので、50年前の洋服を私どもはまだ着ているということですので、あちこちに窮屈なところが出てきているのではないかとこのように考えております。

二つ目は地方分権であります、先ほどから申し上げている通り、自主・自立、今までのように、国におんぶに抱っこでいる市町村ではなりません。住民の皆さんのニーズ、課題を、その都市の中で解決をして行くというような実力をつけて行くことが必要だということの方に言われております。

また、住民の皆さんのニーズは、ITを始めとして、どんどん高まって行くばかりですが、現在の私どもの能力からすると、それらのすべてに対応できるような状況にはなっていないということで、行政も総合デパートの必要が求められております。住民の皆さんがどんなご要望を持ってきても、役所の中ですべてお応えが出来るような総合的な力を持って行くためには、やはり規模の拡大が必要であろう、人材の確保が必要であろうということの方に考えております。

また、少子・高齢ということになりますと、まさに日本の危機でありまして、生産人口の減少でありまして、経費のかかる国民の皆さんがどんどん増えて行くというようなことですので、国力にもかかわることになってくるわけで、これらの解決にもやはり行政の効率化、スリム化というものが求められているということに思っております。

もう一つ挙げるとするならば財政の問題ですが、今まで高度経済成長ということで、右肩上がりというようなことをバックに、実力以上のサービスを皆さんに提供してきたということだということの方に思っております。その分、今その実力以上の分は借金として、今後大変な問題になりつつあるということですので、もうこの辺で身の丈に合ったサービスにして行く必要があるのではないかとこのように含めて、現在合併というものが議論され、必要だということの方に言われているゆえんだらうということの方に考えております。

小櫻教授 ありがとうございます。

これはよく組織論のところでは言われているんですけども、リーダーというのは、いわば方向を指し示すことが出来る人ですね。それは、地域の現状をただ追認するのではなくて、その奥底に流れる大きな動き、さらに将来ということを見据えて、こちらの方向に行くべきだと、そういう決断が出来る人がリーダーでありまして、先ほどの市長、町長さんのお話、まさにこの合併の動き、その奥底にあるものを過去から現在、将来への流れの中で、今の合併というものの必要性を的確にとらえられた発言だと思います。

この合併の必要性については、もうかなり議論されまして、ある意味では常識

的なものになっているものですから、続きまして、2番目の柱であります、この1市2町の枠組みのもとで、それぞれが持っている資源、魅力というものはどのようなものであり、それはどのような形でつなぎ合わせて、より磨きをかけたらいいのか、そういう資源と魅力について議論を移して行きたいと思います。

一応これは、1人2分程度で2巡という形で、最初におらがまち自慢という形で発言をしていただいて、その次に、今度は他のまちの魅力と我がまちの資源、魅力をどうつなぎ合わせるかという、こういう順番で行きたいと思います。

それでは、大東町長からまた口火を切っていただきたいと思います。

大東町長 それでは、資源と魅力ということで、2分間ぐらいというお話でございますので、おつなぎをして行きたいと思います。

まず、うちのまちでございますけれども、工業関係から申し上げます。工業の製造品の出荷額でございますけれども、これが平成13年度が金額にしまして3,020億円、住民1人当たりになりますと、県内市の平均を若干上回る程度ではないかなというふうに思っております。業種におきましては非常に多種多様で、多くの業種がありまして、非常にバランスはとれているかな、こんなふうに思っているところでございます。

次に、農業でございますけれども、農業の総生産額が平成13年度が51億円ぐらい、これは県内市町村に比べてみますと、県内市町村の平均の倍ぐらいの実績になっているかなというふうに思っております。特に遠州灘、これは基調講演でも小櫻先生からお話ございましたように、砂地を利用して、そして日本一日照時間が長いという、こんなものを利用しながら、特産品としては大須賀町も同じでございますけれども、温室メロン、イチゴ、トマト、石川小芋、ニンジン、スイカ等が挙げられます。

次に、商業でございますけれども、昭和60年に通産省の商業集積モデル事業の指定を受けまして、郊外型コミュニティマート、ピアの建設をしたことによりまして、おかげさまで、大東町の中心商店街とこれが核になりまして、現在18年を経過した中で、非常ににぎわいをしております。と同時に、主要地方道掛川大東線ともクロスをしている地区でございますものですから、非常にこれとマッチしてきているわけでございます。今後は、掛川市内の中心核と合わせて、町の中心核として位置づけてまいりたいなというふうに思っております。

以上でございます。

小櫻教授 それでは榛村市長、お願いします。

掛川市長 これは私のまちの自慢というよりは、1市2町がまとまったときに一番活用できるものは、やはり新幹線駅とインターチェンジだと思うんですね。さらに第二東名のインターチェンジも出来ますから、これは東京等大都会への直結、その距離も時間も短くなるということですが、これからは自主独立しなければいけないけれども、やはり日本の人口の4分の1が集まっている東京には、そこと直結していなければ商売できないことがたくさんありますから、新幹線の駅を十

分活用していただくということだと思います。

それで、そこには東海道本線もありますし、国道1号線もありますし、第一、第二東名もある、それに自分の町が直結するという事で皆さんも期待していただきたいと思います。150号線でもこれだけ交通があって、それぞれいろいろな商売をやっていらっしゃるわけですが、そういう東西の大動脈が通っているということは、これから南部の2町の方にとっては一番大きな資産になり得るのではないかというふうに私は思っています。

それからもう一つは、これは大須賀町さんにも言えるのですが、お城があって、そこに図書館とか報徳社とか文化の集積ですね、文化の集積をきちんとまとめて魅力のあるところにしつつあるということで、それが生涯学習という旗印とあわせて教育・文化・観光ゾーンとして整備しつつあるということであります。

それからもう一つは、山が9,500ヘクタールありまして、山だけで9,500ヘクタールというのも大きいので、大東・大須賀の面積二つ合わせても、それよりも大きい山が広いんですね。山なんかあったってしょうがないという考え方も一時ありましたけれども、最近ではやはり、山というものは降った雨がきれいな水でゆっくり出てくるところですから、やはり上流の山が安定している、そこからきれいな水が出るということは大事なことです。

今、大東町さん大須賀町さんも、議員さんを始め、掛川のまちを見て歩こうということをやっていると思いますが、来た方々にそれぞれご感想を聞いてみますと、「掛川って広いな」なんて一人冗談を言う方は、ずっと掛川の一番奥まで30キロもあるものですから駅から、「間もなく日本海へ出ちゃうのではないかと思った」というくらい奥が深いと言っていました。実際1町16村のうち原泉という村を私は森の都と言って整備しているんですね、キャンプ場を造ったり。それは、面積はちょうど大須賀町と同じ面積なんです。それで、住んでいる人は800人しかいない。過疎で大変だ、大変だと言っていますけれども、しかし、みんなキャンプに来たら、こんないいところはないと言うんでしょう。そこに最初から住んでいるんだから、永久キャンプ人ですよ。そういうことで、森の都ということを大事に考えています。

さっきも申し上げたように、少し南北に長くなり過ぎますから、今日も掛川駅からこの役場まで何分かかかるか計ってきたんですけれども、今日は休みの日です。いたので18分で来ました。どこからも15分という構想、これをクォーター構想、どこからでも15分、千浜からでも15分というような体制にして行けばもっともって一体感が出て、東西の大動脈に直結できるということになるとより活力が出来るし、工業出荷額なんかもどんどん上がりやすくなるのではないかと、工場誘致もしやすくなるのではないかとというようなことを考えています。

小櫻教授 ありがとうございます。

それでは伊藤町長、お願いします。

大須賀町長 私が町民の皆さんの、こんな数多くの皆さんの前で言うわけですので、

皆さんの方がよくご存じのことと思いますが、小笠山から海岸までということ、大変自然に恵まれた大須賀町であります。しかも、山から海までということ、いろいろな景色に接することが出来るというような状況のまちであります。ただし、半分以上小笠山でございますので、今までこの開発が私どもの弱小の財政力等では少し思うに任せなかったというようなことはございます。

また、歴史につきましては、横須賀城を中心として、その先は三熊野神社から私どもの町は栄えてきたということでございますので、今その歴史にまつわる事柄につきましては大変誇りに、情報発信が出来る事柄が数多くあるというように考えております。横須賀城では、掛川市長さんも大変興味を持たれておりまして、こういうような時期ですのでいろいろな勉強をさせていただいておりますが、横須賀城から清ヶ谷、三沢を抜けて、菩提から掛川の高御所というところに法多のこちら側から行って東側を通って行くという、私どもから言うと掛川街道、掛川さんから言うと横須賀街道、一番険しい峠がハラスリ峠、ハラスリ街道だというようなことも言われております。市長さん、その道に向こうから菩提まで草刈りをやってくれたということですので、一度歩いてみたいなというふうに考えております。

その後、その街道がどこを歩いて私どもまで来たのか。また、掛川さんのお城で、今で言えば人事異動なんです、お城が若干お殿様の異動で空白になるような時には、私どものお城から掛川市さんの方にその留守の間治めていたというようなことですのでつながりも深い。また、徳川の時代には一番の東方の城として掛川と私ども、そして今川、武田、徳川との戦いで高天神城ということですので、大変歴史的には私ども1市2町は結びつきが過去からあるというふうに思っております。そんな歴史を生かした文化としての三熊野神社のお祭り等につきましては、江戸の流れをくんで、今年は江戸開府400年祭に東京千代田区からお招きをいただいて、11月には江戸の方にも行こうというようなこともございますので、文化も誇れることであります。

そして、男女共同参画、また交通死亡事故ゼロの日を1,000日以上続けたこともありますし、ごみとかいろいろな分別収集等につきましても、住民の皆さんは大変意識の高い町民性を大須賀町は持っているというふうに私は考えております。
小櫻教授 ありがとうございます。

限られた時間におらがまちの自慢を話していただくというのは大変ご無理があったかと思いますが、ただ合併というのは結婚ですので、おらが魅力と同時に合併相手、結婚相手の魅力についても少しまた語っていただいて、それとおらがまちのいいところとどうつなげるかという、その点でまた大倉町長からよろしく願います。

大東町長 それでは、その前に、昨日経験したことをちょっと伝えておきたいなと思っております。

実は昨日、うちの町の議会がタウンウォッチングということで、掛川市内を探

訪させていただきました。出かけるときに、掛川市役所前で市長さん以下、たくさんの方々に非常に丁寧にお見送りいただきまして、ようやく勇んで行きました。そして一番に着いたところは、ならここの里ということで、非常に山の中でございましたけれども、自然に恵まれた非常に素晴らしいところでもございましたけれども、この行く道路でございますけれども、ほとんど対面交差が出来ない道路と。ここと将来合併しなければならないのかなと、若干そんな思いもしましたけれども、非常に自然が素晴らしいところでもございましたけれども、若干そんな気がしたわけでもございました、これも合併の中で一つ考えて行かなければならないかなと、そんな気がしたところでもございます。

次に、うちのまちの施設について若干ご紹介させていただきます。まず、既に皆さん方もご承知でございますけれども、東京女子医科大学の創設者の吉岡弥生先生が町の出身だというようなご縁の中で、高等教育機関の誘致を進めました。これには榛村市長さんにもいろいろお助けをしていただいたこともございますけれども、平成10年4月に土方地内に開学いたしました。同時に、吉岡弥生記念館も町で建設いたしましたけれども、館長としては、東京女子医大の現在日本女子医科学会の会長さんをしております橋本葉子先生でございますけれども、この方をお迎えして運営をしているところでございます。全館を通じて健康セミナー等の特別展、あるいは健康セミナー等を開催してきております。

県内には、医科大学として浜松医科大学が有名でございますけれども、こんなものがございまして、医学関係の記念館としては恐らく国内では初めてではないかというふうに思っております、非常に大変貴重な施設であるというふうに考えております。特に、この大学におきましては、将来的には掛川市民病院との連携が出来ればしていただいて、全体の地域の医療向上に寄与すればなど、こんなことも考えております。

もう1点、町で国際的な人物といたしまして、松本亀次郎先生という方がございます。この方は、戦前におきまして中国人の留学生に日本語を教えたということで、中国では大変高い評価を浮けておりまして、40年間に約2万人の中国人に日本語を教えてきた、こんなことも言われております。不幸にも太平洋戦争が始まりまして、先生の学校は閉校を余儀なくされましたけれども、平成7年には亀次郎先生の生誕100周年記念ということで、現在亀次郎先生の最後の教え子ということで、北京大学の教授でございます汪向荣(ワウワン)先生を町に招きまして記念行事をいたしまして、それ以後町では、中学生を毎年20名、約1週間中国に派遣いたしました。中国の若者との交流をしておりますけれども、本年につきましては新型肺炎の関係で中止をしてきております。そんなことをしていることを皆様方にもお伝えをしておきたいと思っております。

小櫻教授 それでは榛村市長、お願いします。

掛川市長 時間の関係ですから、四つだけ申し上げたいと思いますが、一つは、今、住民・市民にとって何が一番関心のあるテーマか、あるいは何を一番願っている

かと言いますと、やはり健康であるということと、年とってから誰に介護されて自分は死ぬのか、介護はどうだという福祉の問題。保健と治療と予防、介護、そういうことだと思うんですね。ですから、そういう意味では、今、大倉町長さんおっしゃったように、東京女子医科大学があるということは非常に大きな、吉岡弥生先生という女医さん、そして看護師を養成するというようなことで、非常にありがたい存在ですから、掛川市立病院と、それからいわゆる1市2町にある保健センターと、それからいろいろな各種の健康管理、病気治療をきちんと市立病院と提携してやったら本当にいいまちが出来た。そして、そこまで行く距離がみんな15分になれば、安心していつでも救急医療が確立すると、これが第1のビジョンだと思います。

それから、二つ目のビジョンは、ここの地域はお茶が一番採れるとか、イチゴだけでも40億円あるとか、お茶は100億円あるとか、それから、メロンとかスイカだとか、その他野菜も結構ある。ですから、サンサンファームもミナクル市も繁盛しているんですね。皆さん余り意識していないんですけども、浜松、湖西から清水までの間に人間は何人いるかという200万人いるんですよ。200万人いて、それでその間の一番真ん中がここなんですね。だから、200万人の大都市の中の真ん中に一番自然がある、一番農業が盛んだと、こういう位置づけにすると、赤ずきんちゃんがあればだんだん大きくなったというのは、そういう条件があったからだというふうに考えられます。したがって、これからはこの地域は農の文化、食の文化、そういうもので本当に生産地だけれどもおいしいものを食べているねという生産消費地づくり、生産地はその消費の文化でも高いものを持っていると、これが大事なことだと思います。それが二つ目です。

それから三つ目も、先ほど大倉町長さんが、大東町は3,000億円の工業出荷額があるとおっしゃったんですけども、そしてしかも40社が本当にいろいろなことをやっているんですね。大須賀町で言えば、スズキ自動車もあるけれども、何といってもコーニングジャパンですね。コーニングジャパンの液晶技術というのは、これから日本経済をリードする技術だと言われていていますね。そういうものと、うちの方にある携帯電話の松下通信は、一時期日本の携帯電話の3割を生産していたんですね。掛川の工業出荷額が8,000億円ですから、この三つを合わせると1兆2,000億円なんですよ。

そういう工業出荷額で、先ほどの農の文化、食の文化と、それで工業もいいというのは、こういう都市というのは一番バランスのとれたというか、これからの一つの生き方として大事な問題、それが3点目のことです。

4点目のことは、うちのまちはずっと生涯学習都市ということをやってきましたが、大東町さんで言えば全村構造改善というようなこと、それから大須賀さんで男女共同参画と、いろいろまちづくりの精神的なよりどころというか、アイデンティティーというか、まちをまとめて行く理念というのがあるわけですけども、その共通は報徳思想ではないか。この界限は報徳が、今日本の国がおかしく

なっている、少年殺人だ、何だかんだおかしな国になってきたんですが、もう一遍、二宮金次郎を復活する必要があるのではないか、また、その価値があるのではないかというふうに考えておりますので、そういう意味で、私が大日本報徳社の社長だから言うわけではなくて、昔、我が子もかくあれかしということで、どの小学校にも金次郎の銅像がありましたけれども、もう一遍そういうことを学び直す価値が新しい都市としてあるのではないか。子供の教育が一番しっかりしているまちだと、こういうことが出来たらいいなと思っております。

小櫻教授 ありがとうございます。

それでは伊藤町長、よろしく申し上げます。

大須賀町長 私どもから見て、まず掛川市さんの魅力は都市機能だというふうに思います。その都市機能をつくり上げてきたものは五大動脈ではないかというふうに考えております。東海道、あるいは市町村の素晴らしい成果で出来ました、ご苦労いただいた新幹線。それから国道1号、現在の東名、そして第二東名のインターチェンジが掛川に出来るというようなことで、この五大動脈を私どもは大変魅力に感じ、これを南北道で結ぶことによって、私どもの田園的なまちと都市機能が融和したときに、さらに発展をする田園的な都市機能に変わって行くのではないかというように考えているところであります。そこらが着実に進めば、この地域が、地方が田園的な文化都市として非常に魅力のある地域になるのではないかというふうに考えております。

また、住民の皆さんのアンケート等でもご要望いただいております健康・医療のことですが、これらについては、先ほど市長さんも申し述べられましたが、現在の掛川市立病院、そして大東町さんにございます東京女子医大の将来の方向等を発展的に考えれば、非常にその辺も住民の皆さんのニーズに応えていける力強い都市になる、そんな掛川さん、大東さんに魅力を感じております。

小櫻教授 ありがとうございます。

実は、各1市2町の資源、それをどうつなげるかということは、実は3番目の柱であります将来ビジョンに深くつながっているわけですがけれども、これで、いよいよ最後の柱であります1市2町合併による新市の新しいまちづくりについて語っていただきたいと思えます。

それでは、これも大倉町長からよろしく申し上げます。

大東町長 私は、この1市2町の新しいまちづくりの中で、前段掛川市さんでもお話ししましたけれども、とにかく美しい、要するに魅力のあるまちをつくって行きたいなど、こんなような思いがあるわけでございます。これには内容的にはいろいろなものがございます。例えば、そこで町民の皆さん方が文化的に活動していただく施設、あるいはよそのまちからたくさん訪れていただく、そういった施設等、そんなものの充実をして行かなければならないかなというふうに思っているところでございます。

うちの町では、若干おつなぎをしておきたいですけれども、実は昨日でござい

ましたけれども、大東温泉シートピアがオープンいたしまして5年でございますけれども、昨日130万人の入館記念をいたしました。おかげさまで、1日平均にしますと860人ぐらいの利用者をいただけるわけでございます。これは温泉でございますので、どこでもというわけにも行きませんが、将来大きな市になったときには、こんなものを十分活用していただきたいなというふうに思っております。

要するに、他の地方から見て非常に美しいまちである。そして、どうしても一度は行ってみたいまちをつくって行く必要があるのではないかなと、こんなふうに考えております。それぞれの施設を大事にしながら、こういうものに対応していただければ必ずこれが成功するのではないかなと、こんなふうに考えております。

以上でございます。

小櫻教授 ありがとうございます。

それでは榛村市長、よろしく申し上げます。

掛川市長 先ほど四つぐらい申し上げたことは、既に新しいまちのビジョンのヒントを申し上げたようなものですが、今、大東町長さんが美しいまち、魅力あるまちということをおっしゃいました。私も全くその通りだと思うんですね。私は今、全国の地域づくりの800ぐらいの市町村の入っている地域づくり推進協議会というのがありまして、その会長を仰せつかっているんです。ですから、全国800の市町村は全部どういう地域づくりをやっているかということをおお体承知しているんですけれども、共通して魅力ある、美しい、緑いっぱいの魅力あるまちづくり、こう言っているんですね。どこも全国みんな言っているんですね。

だから、それではどういうことがここだけの特色になるのかということになります。一般論としては、魅力あるまちというのは、例えばおもしろいまち、いろいろな珍しい情報があるまち、あるいは美しいということもそうですが、癒されるものがあるとか、いろいろあるわけですが、共通して大事なこととしては、その地域の風土に適しているということが大事です。

私は、その風土といえば、先ほど申し上げたように、砂地農業とか、砂地というものと、それから三本鍬が発達したネットウの掛川、そういうものに根差した、そして200万人の大都市の中の真ん中にある農業、そういう位置づけとか、がんに効くとか、ビタミンCがいいとか、緑茶にビタミンCがあるというのを、今からちょうど80年前に証明して、緑茶はビタミンCがあるからいいんだと言った人は掛川の人なんです。三浦政太郎(セイヤウ)という人ですが、この三浦政太郎の奥様が三浦環(タマリ)という有名な歌手です。三浦環が有名なものですから、旦那さんは陰に隠れちゃっていますが、実はビタミンCがお茶にあるということを言った最初の人なんです。

だから、この地域はお茶もたくさんありますから、お茶で行く、スイカで行く、メロンで行く、イチゴで行くというようなことで、そういうことがこの地域

の土壤に適している、風土に適している、だからおもしろいとか価値があるとかということになるわけで、魅力とか美しいというのはそういうものではないかと思っているわけです。

もう一つ、掛川の自慢話の一つは、オレゴン州というアメリカに農場と森林を持っているんですね。これは、掛川は外国に別荘を持っている。だけどそれは1年に1,000万円くらい維持費がかかるんですね。だから、もったいないのではないか。今までに千何百人行ったから、ここらで合併するときそういうものを持ち込んではいかんじゃないかという意見と、合併になっても大東・大須賀の人たちにもうんに行ってもらって勉強してもらおう方がいいのではないかという意見とがあるんですけども、これからは、その地域の人たちは国際的にどういうプロジェクトを持っているか、国際交流についてどういう見識を持っているのか。さっき大倉さんは松本亀次郎先生のことをおっしゃった。中国との関係ですね。

そういうように、グローバルな時代ですから、そのまちのビジョンというのは国際性とか地球性とか、そういうものをしっかり持っている必要があると。それからあとは健康管理、介護の問題というようなことではないかなと思いますので、これをこれから、今日、皆さんと議論する中で深めることが出来たらいいなと、こう思います。

小櫻教授 ありがとうございます。

では、伊藤町長お願いします。

大須賀町長 将来のビジョンなんですが、先ほどそれぞれの市長、町長さんから我がまちの魅力というようなものが発表されましたが、それらを、単純に言えば結ぶことが将来のビジョンとしては大切ではないかというふうに考えております。

また、私どものまちからすると、それらの魅力を結ぶ、それはすなわち南北道だろうというふうに考えております。それから、皆さんの将来のニーズであります医療や福祉、また学術や学園というようなものも非常にポテンシャルの持っている小笠山周辺に配置をして行くことによって、自然と調和した素晴らしいところになるのではないかというふうに考えております。

また、掛川市長さんは今スローライフというようなことで、急ぎ過ぎた20世紀という反省も含め、少しゆったりとした生活ということでスローライフということ提唱されておりますが、それらについて、今150号等ではサンサンファーム、またミナクル等が大変人気を博しているわけですが、あれもある意味ではスローライフではないか。自分の住む、生活している近くではなく、その地域までのんびりと出て行って、その地域のいろいろな景色等を眺めながら、出来た産物を仕入れてくるということですので、ある意味ではスローライフの一部ではないかというふうに考えております。

そういう意味では、この海岸砂地、大変魅力のある地域、資源だというふうに考えておりますので、私ども今、地域の皆さんとこの150号を、サンサンのような施設をたくさん造って、地産地消の街道等にすることが出来ればいいのではな

いか。また、学校も週5日制になりました。子供たちの週5日の学習の場として、また総合学習、また体験学習等も大変論じられるところでもありますので、子供たちが宿泊施設を造って、そこに植えつけに来て、春、植えつけ、夏に中間的な管理、そして秋には収穫に訪れるというような、地域としては非常に可能性と言いますか、適した地域ではないかというふうに考えておりますので、そんなことも将来のビジョンとして願わくは協議会等で議論がいただければ大変ありがたいというふうに思っております。

小櫻教授 ありがとうございます。

先ほど、リーダーの資質として、役割として方向を指し示すということをお願いしたんですけれども、実はもう一つリーダーの資質、役割がありまして、それは人を動かすということですね。命令とか強制ではなくて、自主的・自発的に人を動かすのがリーダーの役割であると。そういう意味では、先ほど市長、町長の方から、地域の資源と魅力、まちづくりのビジョンについて語っていただきまして、こういうまちを何とかつくりたいと。そういう意味で、市民・住民の皆さん方のまちづくりを促すという、そういう提起ではなかったかと思えます。

しかしながら、実は予定されています時間を既に10分ほどオーバーしてまして、これについては語り尽くせないことがまだ多く残されていると思えますけれども、この後、フロアの会場の皆さん方からの質問の時間もぜひとりたいと思えますので、誠に申し訳ないんですけれども、最後のまとめの発言ということをお願いしたいと思えます。

それでは、大倉町長からよろしく申し上げます。

大東町長 非常に時間の経つのが早いわけでございます。

私のまちでは、今非常に大きな点としてとらえておりますのが高齢化の問題でございます。特に、最近の新聞紙上でも発表されておりましたけれども、うちのまちの男性の平均寿命が80歳、79.9歳、こういうことございまして、高齢者福祉、あるいは老人福祉と申し上げますか、そういったものにどうしても取り組まざるを得ない。こんなことを言うとご老人の方に申しわけないですけれども、そんな大きなまちの課題がございます。

非常に予算は苦しいわけでございますけれども、今の計画といたしましては、一つの方向性として17年4月オープンを目指して、一応80床の老人ホームを建設することに決定いたしまして、今、用地のそれぞれ交渉に入っております。これが、これからのまちとしての大きな課題になってこようかなというふうに思っております。もちろんこの生産を上げることも重点でございますけれども、高齢者対策福祉、これに力を注いでまいりたいな、こんなふうに考えております。

以上でございます。

小櫻教授 それでは、榛村市長、よろしく申し上げます。

掛川市長 小泉さんの観光立国という政策がありまして、住んでよし、訪れてよしのまちづくり、国づくりと言っています。やはりこの地域は200万の中の真ん中

にあります。それで、さらに東京、大阪、首都圏の中、大都市圏の中の8,000万人の真ん中にあります。ですから、それを活用して、さっき伊藤さんがおっしゃった地産地消街道というやり方もおもしろいと思いますし、とにかく小笠山というものが高天神から始まって、あの界限全体でこの地域の大公園であると同時に水源地であるし、いろいろな歴史の里である。この小笠山の活用をみんなで考えるということは非常に大事な問題だと思います。それから、海岸の活用ですね。

そして、この地域には中小企業もたくさんあるんですね。ですから、大企業だけでなく、中小企業の技術革新とかベンチャービジネスとか、そういうものをきちんとおこしていくということが大事なことです。

最後に一つ、今日はある程度いらっしゃいますけれども、女性の方ですね。少子化問題も介護の問題も、その他いろいろは女性の自立だとか、女性に対する理解だとか、女性参加というのが一番大事でありますから、新市が出来たら、若い女性が市議員に立候補するとか、あるいは男女共同参画とか、女性が生き生きと子供を3人産む、産みたくなるまち、そういうものを目指したらいいなと思っています。

小櫻教授 ありがとうございます。

それでは伊藤町長、最後の締めという形をお願いします。

大須賀町長 今、大変魅力的な希望の持てるというようなお話が多かったわけですが、合併というのは、ただ合併してどうなるのではございません。私どもみんなの力で合併というのはつくって行くものだというふうに理解をいたしておりますので、ぜひ、たくさんの資源や人材があるわけでございますので、これからは、お互いがそれぞれの立場を尊重し合いながら協調し、また信頼をし合っこの合併に向かって行きたいと思っております。どうぞ住民の皆さんも、それぞれ積極的な交流をよろしくお願い申し上げます。

6 質疑応答

小櫻教授 ありがとうございます。

一応これでパネルディスカッションの討論というものは無事終了ということになるんですけども、先ほど申し上げましたように、ぜひ会場の方でこの点を聞きたい、あるいはこの点についてどう思うのかという、そういうことについて、何とか時間を確保できましたので、フロアの方からの発言、質疑をお願いしたいと思います。

それでは、どなたでも結構ですので挙手をしていただいて、自分のまちの名前、それからお名前も冒頭一緒をお願いしたいと思います。

いかがでしょうか。どうぞ。

質問者 大須賀町の男女共同参画推進町民会議というのがありまして、その委員をやっております金原と申します。

二つほどご質問したいですけれども、その前にちょっと、今、大倉町長さんの

松本亀次郎さんの話を聞いていて思い出したものですから、ぜひご紹介したいと思えますけれども、もう38～9年、あるいは40年近く前になると思えますけれども、静岡県の教育出版の方の主催で「郷土の発展に尽くした人々」という子供向けの本を2冊発行しました。その一部に中国人留学生の父、松本亀次郎というテーマで、不肖ですが、私が執筆させていただきました。

資料を集めて、ほぼ1年ぐらいかかって100枚ぐらい書きましたけれども、提出するについては30枚ぐらいに削って、だもんでいいところがみんな消えちゃったわけですが、さらに編集員によって10枚に削られたものですから、2冊シリーズの中のごく一部ですけれども、亀次郎さんが非常にすぐれた方で、土方村から推奨されて師範へ行くというので、高天神社へこもって勉強したとか、試験に落ちちゃったんだけれども、嘆願に嘆願を重ねて7月に入学を許されたとか。一番有名なのは、周恩来さんの恩師であるということですが。

ずっと調べて行きますと、吉岡弥生さんが小学校4年生のころに亀次郎さんが高等学校2年生ぐらいで、代用教員というか、そのころは教師の補助を高校の高等科の優秀な人はやったらしいですが、そんなお話もあったり、一番感動的なのは、関東大震災に掛川駅で遭って、列車が通らないから、仕方がないから清水まで行って、清水から船で東京へ向かったと。苦心して建てた建物、学校が全部壊れちゃったんだけれども、船の上でもう一度再建しようという決心をしたとか、そういうエピソードがありますけれども、10枚に削られたものですから、私が一番筆が乗って良く書けたなと思うところはすべて削られてしまって粗筋だけになっておりますけれども、私も余り自慢してはもと思っただし、私に書かせてくださった校長さんも余り宣伝してくださらなかったの、図書室の片隅に眠っていると思えますけれども、40年ぐらい前にそんな本が出ています。挿し絵も小笠郡内の中学の美術の先生が書いてくださっています。ちょっとご紹介が長くなりましたけれども、お話を聞いていてぜひご紹介したいと思いました。

お尋ねと言いますか、お願いしたいのは、現在大須賀町は、ご存じのように男女共同参画都市宣言をしております、そのスタート当時から行政の皆さんも努力を重ねてくださいましたし、町民の皆さんも努力してくださったおかげで、今、体制としてもかなり進んでおりますし、平成9年ごろと比べて町民の皆さんの意識もぐんと進んでおります。今年の3月には、念願の男女共同参画推進条例というのも出来ました。今、それを皆さんにPRしようと思ってパンフレットも作っておりますが、掛川市さんの方でも条例制定に手をつけていらっしゃるようですが、私が一番心にかけておりますのは、地域によって、まちによって参画意識というのは非常に格差がありますけれども、そこをどう平準化する。低い方へ平準化するのではなくて、出来れば、自慢じゃないですが、大須賀町の水準にまで引き上げていただきたいという、その努力、これは具体的なことにかかわりますから、いずれ合併協議会の方で検討してくださると思えますけれども、今、私が一番の関心はそこで、合併しちゃうとせっかく苦労して作った条例はどうな

るのという疑問も持っております。

二つ目は、交通アクセスですね。今のところ、車を自分で運転する人は、それこそ18分か、ゆっくり運転しても24分ぐらいで掛川へ行かれますけれども、その手段を持たない人、特に体が弱って病院へ通いたい人、掛川病院まで行くのに大変苦労しております。そこらの交通アクセス、どんなにしていただけるのでしょうかというのが非常に気になります。

失礼しました。

小櫻教授　まとめて後でご回答はお願いしたいと思いますので、先に質問、ご意見というものを受け付けたいと思います。

他にいかがでしょうか。どうぞ。

質問者　私は大須賀町の荻原と申しますが、今部落内の、一応自治会長を仰せつかっておりますが、今、皆様方の長、会長の話の中で、小櫻先生もおっしゃった通り、市民になった場合、市民が望むについては、一番の重点は家庭の支出を少なく、税とかそういったものは第一に皆さんが望んでいるのではないかと、私はかように思うわけですが、その中で、私も67歳になりまして、昨年まではある会社に働かせていただきましたが、リストラをいただきまして、3月で退職させていただきましたが、そういった中で、私の年金と所得等の合算によってその税金が配賦されて、国税も支払い、その中で、現在は無職でございますが、無職に対して介護、4、5年前から国の法律によって介護という制度が出来ましたが、その制度の中で一応1年間いろいろ納めた中で、無職だもんですから、介護保険というのは5段階あるそうでございます。金額的には皆さん勉強していると思いますので申し上げますが、5段階の中で私一番最高を納めたわけですが、今現在遊んでおります。なかなか介護保険が下がっておりません。みんなこういった中で一度は経験しなければならぬ問題でありますものですから、私はそれを発言させていただくわけですが、直ちに所得がない場合は介護という手当が一番最低に落としていただくような、市長さんをお願いしたいですが、そういう制度をこさえていただきたいわけ。

そして、もう一つということは、行政改革の中で小櫻先生もおっしゃった中で、市長が1人になり町長は2人減るということで非常に結構というわけではないが、気の毒な話でございますが、それ以後にも何かの職務に就こうかと思いますが、その中で、市長と市議員に対して私は残酷なことを言わせていただきたいということはどういうことかということ、年俸制にしていいただきたい。年俸制ということは、皆さんご存じの通り、極端、残酷に言うと、働かざるものは食うべからずという言葉がありますが、早い話、この人は市のためになりますなという方は、その人に幾分なり上昇して、アップをさせていただけるような制度に持っていければ、非常にいいまちに、いい市になるのではないかと、どういふ考えを会長さんは持っているか、その点を一つお答え願いたいと思います。

以上です。よろしく申し上げます。

小櫻教授 ありがとうございます。

他にはいかがでしょうか。どうぞ。

質問者 横須賀城は、歴史の中でくしくも400年以上経過するという文化遺産でございます。それぞれに掛川市は立派な天守閣も出来ましたし、大東町の高天神城も大型バスが楽々駐車できるような、また取り入れ道路も整備されて行く中で、大須賀町のこの横須賀城そのものの整備が、埋蔵文化財法の発効によりまして、発掘調査が済まなければ前へ進まないという中で、平成15年、16、17年度におきまして、約6億円から7億円という金額を伊藤町長の奮闘のもとに予定はされておりますが、まだ全体構想の中で3分の1ぐらいしか経過しておりません。完成が出来ておりません。

そんな中で、私も松尾町住民はNPOというようなものを計画しまして、現段階では草刈り程度の奉仕事業をしておりますけれども、将来構想も地元としても出来ておりますし、この合併の中で何とかもう少し早く公園整備という整備推進委員会というのが立ち上がっておりますが、今に30年になります。いまだに完成はいつになるかということも出来ていない中で、それでは磐田地区の合併問題、そのほか菊川とか他の地区の合併問題に比べまして、歴史的なこういう文化遺産を、先ほどから話題になります観光という面でも生かすについて、3点セットの立派な設備にするについては、特に横須賀城の整備を力を入れていただきたいと、このように思っております。

よろしく願います。

小櫻教授 ありがとうございます。

他にはいかがでしょうか。

それでは、3名の方にご質問いただきましたので、一つは男女共同参画という、この点について、各地域間の格差をどう是正して行くのか、全体のレベルアップという問題と、それから南北軸の交通、とりわけ交通弱者、車を持たない人、公共交通に依存している方、そういう人に対する対策をどうするのか。

それから、合併した後の住民負担の問題、特に介護保険の保険料ということの絡みで、やはり所得で非常に少ない、困っておられる方々に対する配慮というのはどうなのかという。

それから、年俸制という形で、これは議員さん、首長さん以外に、全体の職員ということも含めて、働きに応じたそれだけの給与という、そういうご提言。

それから、この1市2町にあります三つお城、非常に個性もあり、特徴もあり、歴史も非常に多いんですけれども、そういう物の整備というもの、これは公園の整備ということも含めましてどうかという、そういうご質問だったと思います。

それでは、すべてについてでなくても結構ですので、また、大倉町長の方から先ほどの質問、意見に対してお願いしたいと思います。

大東町長 今、3点のご質問をいただきましたけれども、残念ながらうちのまちは、この3点のご質問についてはすべて遅れているかなという認識を持っております。

特に男女共同参画でございますけれども、これは現在は改めて男女共同参画という言葉を使うような時代ではなくなってきたのではないかと、そんな認識もありますけれども、実際にはうちの町でも、これにつきましては非常に大須賀町さんは一歩先行しているかなという私は認識を持っておりますから、大須賀さんのいき方を勉強しながらこれには取り組んでまいりたい、こんなふうに考えておるところでございます。

それから、交通アクセスの問題でございますけれども、これは恐らくどこのまちでも共通の課題であるかなというふうに思っております。うちのまちも、具体的にどうのという確たるものはございませんけれども、いずれにいたしましても、特に自家用車を持たない方、こういうことになろうかと思っておりますけれども、うちのまちでも社会福祉協議会等を通じながら、今このことにつきましても鋭意努力をしているところでございます。これらにつきましても、大須賀町長さん、あるいは掛川市長さんのご意見も聞きながら、私のまちは取り組んでまいりたいなというふうに思っているところでございます。

それから、今、市民が望むそれぞれの家庭からの出費、いわゆる税金はなるべく安くということでございますけれども、これは当然のことでございますし、我々が一番努力しなければならない点であろうかなというふうに思っております。ただし、新しいまちづくりをして行くにはそれぞれの予算措置も必要でございます。例えば、国・県の中で枠組みといいますか、一つの国・県で推奨している問題でなくてやって行きたいというような場合には、どうしてもそれぞれの町の単独の出費も必要になってきます。これらも大きな課題でございますけれども、これらもこれから新しいまちをつくって行く中で十分に検討をしてまいりたいなというふうに思っております。

後の問題につきましては、市長さんの方へお願いします。よろしく願いいたします。

小櫻教授 それでは榛村市長、お願いします。

掛川市長 時間の関係で、箇条書き的に整理して申し上げます。

まず、男女共同参画については、これは掛川ではこの間、男と女が仲良く暮らす安心とゆとりの掛川条例というものを作ったんですけれども、婦人会というのはどうしても農村型社会の組織ですね。ですから、NPO的社会になったら女性会議を作るとか、何か1市2町で一つの女性組織を作るといいなと思っておりますね。掛川はもう二十何年女性会議というのをやってきました。進んでいるものに合わせるのももちろんいいわけですから、役場の中に新しい一つの新市が出来たら、そこに女性の部長なり、課長なりが登用できるだけの人間を養成しているかどうか。それから、いろいろな各種の審議会が出来るわけですが、そこに女性がどのくらい比率として参加しているかというようなことを目安として、今後とも女性が明るく、女性が前向きの男女共同参画というものを頭に置いたまちづくりをしたいと思っております。

それから、公共交通については、確かにバスが次から次へと赤字のために廃止になってしまったんですね。これは大須賀町の方にしてみると、西大谷を越えて小笠山の中をこんなになって行くわけにはいかない。それでは別の入山瀬の方へ出るか、旦付をって行くか。いずれも山道ですから、なかなか路線バスは、その中間は乗り降りする人がいないというようなことで、むしろあそこをって袋井へ行くバスの方がいいというような形になってきたわけですね。ですから、今後合併しましたら特例債を使って、できるだけ、先ほど申し上げたように掛川駅、大須賀15分というような路線を確保するということを考えなければいけないと思います。

それから、掛川市内でも足の弱い人がマイカーに乗れない、何とかしてくれというので、今年4月から市内循環バスというのを走らせたんです。この循環バスというのは幾ら乗ってくれても20万人ですね、1年で。すると、どうしても2,000万円か3,000万円の赤字が出るんです。ですから、何か独自のスクールバスだとか、独自のバス路線を、独自に新しい都市が考えることが出来るかどうか、これはいろいろな研究を試みる価値があると、こういうふうに思いますけれども、路線バス業者がやめた路線、あるいはやろうとしない路線を公共でやるということは非常に大変です。したがって、うちのまちの北部の方はボランティア的な地域バスというのを2か所でやっていますね。そういうやり方も工夫して行くということが大事だと思います。

それから、合併についてのそれぞれの市民の負担の問題ですね。これは負担が安くなるか、サービスが向上するか。一番いいのは、負担は安くなってサービスは向上した、これが合併の目的としては一番いいわけですね。しかし、なかなかそうばかりはうまく行かない点があります。幼稚園の料金、保育園の料金も違う。とにかく、一つの市が合併するについて、いろいろ違いを調整する項目というのは1,830項目あるんですよ。その中で調整しますから、私としては、もちろん2町の首長さんのご協力を得て、議会のご協力も得てですけれども、負担についてはなるべく安い方になるよう、それからサービスについてはなるべく高い水準の方へ合わせるという努力をしながら解決して行くということだと思っんですね。

そうすると、経過措置が必要ですね。ですから、その経過措置については、それぞれの地区にいらっしゃった議員さんたちが一番知っている、それぞれの首長さんが一番知っているわけですから、その人たちの意見を大事にして考えるということになりますから、一挙に議員の数をばーんと減らしちゃうというようなことがいいのかどうかというのは、またちょっと、もう少しよく考えてみる必要があるんですね。確かに合併すれば首長も1人になる、助役も1人になる、教育長も1人になる。みんな少なくなるから、その分で計算すると、全部で2億円ぐらい節約になる。ではそれを何とかすればいい。単純に考えるとそういうことが言えると思いますけれども、そうは簡単に行かない点があって、やはりそれぞれ48年違う生活、違う役場で暮らしてきた48年の経過がありますから、それを余り主張

し過ぎたら合併する必要はないんですね。だから、そのところは折り合いをつけて行くという言葉があるように、折り合いをつけて、議員の数とか議員の任期とかはこれから調整して行かなければいけないと、こう思いますね。

それから、お城については3城あって、高天神は、昔徳川家康のころは「高天神を制する者は遠州を制す」と、こう言われたお城ですね。それから横須賀城と合わせて、なぜ掛川城天守閣が出来て、こちらの二つには出来ないかというのは、これはなかなか難しい問題ですが、史跡になっているんですね。横須賀城も史跡、高天神城も史跡なんです。史跡というのは、空堀だとか、ここにこういう石垣があったとか、こういう土塁があったということを実際に詳しく調べなければ何かをやってはいけないということになっています。掛川城の方は史跡ではないんですよ。あれは明治年間ですぐに町役場になっちゃったとか、公園になっちゃったとか、忠魂碑を建てたとか、いろいろで、あれは公園なんですよ。だもんですから、文化庁の制約がなくて天守閣が出来たんですね。ですから、なかなかこれからの整備では、文化庁もお金を出して買い上げをやって、今横須賀城のお城も大分国費で買い上げたんですね。幾らぐらい、もう10億円ぐらいだったか、相当国が買い上げているんですね。ですから、時間がかかるわけですが、高天神城もこれから調査をしてやっていくんですね。

だから、この3城があるということで、一つの歴史の重みというものがあるわけですがけれども、これには文化財についてのいろいろな手続がありますから一挙には行かない。しかし、高天神城も横須賀城も掛川城も、市民の人が行けば本当に昔のことをしのんで、憩いの場としては本当にいい場所ですね。高天神なんか、何回行っても一つの発見がある。それくらい山並みがあっちへ行ったりこっちへ行ったりしているんですね。そういうことありまして、横須賀城も同じことです。前に大石高さんと私と文化庁で出くわしまして、大石高さんが文化庁で物すごい大きい声で暴れた、暴れたというところですが、「何で掛川にはお城が出来て、おれのところは出来ないだ」と言ったことがあるんですね。そういうように、史跡の扱いになっちゃっているから、非常に忠実に学術的にやるということで時間がかかるということだと思いますが、できるだけ3城を有機的につなげて、みんながそれを誇りに思えるシンボリックな、ランドマーク的な公園にして行ったらいいなと、こう思っております。

小櫻教授 それでは伊藤町長、お願いします。

大須賀町長 男女共同参画の関係ですが、私どもの町、私も若干進んでいるというふうに考えております。そんなところから、今後合併をした場合にあっては、高いところの水準に持って行くという努力がされるというように思っておりますので、よろしくお願ひしたいと思います。

また、条例については掛川市さんと私どもの方にございますので、調整がなされるものというように考えております。

交通アクセスの関係で、私どものまちにつきましては静鉄さん、遠鉄さん等双

方入ってはおりますが、掛川の駅前まで、病院までとか直接的に行っていない、どうしても乗り換えが必要だということから、住民の皆さんも大変ご不便を感じているというふうに考えております。そういうことから、病院の関係だけで申せば、直接行ける袋井病院の方をご利用される方が大変統計的に多いということになっておりますので、そんな観点からも、今、掛川市内では循環バスが今年から市内を巡っておりますが、私どもも市内になれば循環バスということも、当然議論の対象になってくるというふうに思っております。また、その前提としては、前提でもないですが、それをさらに早めて行くということは、南北道等が出来ることによって、そんな循環バス等のこともさらに早まってくるというように考えております。

それから、荻原さんからいただきました話なのですが、今、日本の地方税に関しましては、昨年まで非常に高い所得があったんだけど、退職をされて、今年収入がないのに何でそんなに税金がおれのところにかかるのかということなのですが、前年の所得に対して今年お願いをするというような地方税の状況ですので、去年たくさんの所得のあった方は、今年税の方もお願いしたいというような状況にあるかというふうに思っております。いずれにしろ、これからの少子・高齢の時代の中で大変関心を持っていただいていること、また合併でどうなるのかなというふうな心配のことだというふうに思っております。

サービスの点については、私どものまちは、掛川市さん等と合併すれば、サービスは当然上がるというふうに考えております。なぜならば、掛川市さん等については財政力、また専門職等が非常に多く職員等にもおりますので、当然奥の深い、質の高いレベルのサービスが現在提供されているというふうに考えておりますので、私どものまちはサービスは即上がるであろうというふうに思っております。ただ、負担の関係ということにつきましては、合併の精神とすれば、サービスは高い方に合わせ、負担は低い方に合わせるとということなのですが、一概にすべてのものがそのようになるかは、これからの協議の中でされて行くものというふうに考えているところであります。

それから、佐藤さんのお城の関係のことなのですが、本当に長い歴史をかけて地域の地元の皆さんには、大変ある意味ではご迷惑になっているものというふうに思っております。そんなところから、これらの整備促進につきましては大変努力をしているところで、平成15年度、16年度、17年度、3年間は今のところ一応15年が2億8,000万円、それから16年、17年がおおよそ3億円ぐらいずつのペースで、通常年度のやがて10倍ぐらいのペースで、この3年間だけは見通しがついたということですので、これからも先、皆様のご指導をいただきながら、まずは買い上げをして、すぐそこのところを調査をして、発掘をして、そして成果をあらわして活用というようなサイクルで進んでおりますが、努めて努力をしていきたいというふうに思います。

また、この三つのお城を観光的な要素をもって結びつけて行くこと。先ほど言

ったように、掛川の方にはハラスリの峠を越えて行くとか、高天神の方にはルートをもた、歴史をひもといてみるとか、いろいろなことで活用の方向は大いに出てくるといふふうに思っておりますので、これらについても、新しい市になっても引き続き努力をされて行く点だというように考えておりますので、また地域の皆さんにはNPOとか、いろいろなことでお世話になりますが、よろしく願い申し上げたいというふうに思います。

小櫻教授 ありがとうございます。

私、この1市2町の合併の新都市建設計画の策定の委員長もやっておりますので、その中の議論の紹介という形で若干補足させていただきますと、男女共同参画につきましても、これは非常に重要なことだから、今都市ビジョンの議論をしていますけれども、その中に何とか盛り込もう、プロジェクトの中にもぜひ入れて行こうという、そういう方向で議論しています。

それから、交通アクセス、これも特に公共交通というのは非常に重要ですので、南北軸のいわば道路交通の整備という中で重要項目として取り上げています。それもなるべく、行政の負担にも限界がありますので、市民協働で、これは最近送迎のボランティアという形でいろいろなところでもやられていますので、そういうものも組み込んで、それと民間のバス会社、さらにタクシー会社など、そういう民間の力と市民の力、それを加えて、それにさらに行政の力という、そういうものを一体化した新しい公共システムというのをぜひ考えて行きたいと思っております。

それから、お城につきましても、これは1市2町というものが一緒になって文化遺産や歴史というものを残して活用して行こうというときに、この三つのお城はうちのシンボルになるものですから、この三つのお城の整備、さらに連携というのもぜひ重要項目として繰り入れて行くことになると思います。

後、年俸制についてちょっとありましたけれども、これは実は公務員制度の改革の議論が今行われていまして、公務員全体のもう少し仕事、住民のための仕事を熱心にしてもらうという、そういう点で、いわば公務員制度全体の改革、その中で、自治体レベルでいろいろな新しい努力できることも多々出てくると思います。これも合併の中の新しい行政改革という項目で取り入れられています。

ただ、首長、議員の報酬につきましても、これは議会等々で、それなりの議論で決められると思いますので、その点で、市民の監視と納得の上で決められて行くと思います。

以上をもちまして、会場の皆さん方からの質問に対する回答も終わりましたので、これで、一応全体のパネルディスカッションを終了させていただきたいと思っております。予定されました時間は大幅に超えてしまいましたけれども、なおかつまだ言い足りないこと、聞き足りなかったことも多々あるかと思っておりますけれども、これから1市2町の合併に向けての本格的な議論、まちづくりビジョンの作成が始まりますし、合併した後でいよいよ本格的な取り組みも始まりますので、ぜひ今日

の議論を出発点にして、これからも一層深めていただきたいと思います。

それでは、以上をもちましてパネルディスカッションを終了させていただきます。ありがとうございました。

7 閉会

司会 ありがとうございました。

コーディネーターの小櫻先生、パネラーの首長の皆様、長時間にわたりましてのご討議と貴重なご意見をいただきました。本当にありがとうございました。どうぞ大きな拍手でお送りくださいませでしょうか。どうもありがとうございました。

会場の皆様方、多くのご質問、貴重なご意見、ありがとうございました。これを機会に、ご家庭や地域で、合併についての論議をより深めていただければと存じます。

それでは、以上をもちまして、本日の日程すべて終了とさせていただきます。

最後にお願ひでございます。先ほどのアンケート、お書きくださいませ、どうぞ受付の投函箱、回収箱にご投函くださいますようご協力をお願い申し上げます。

また、お帰りの際は忘れ物、お足元にお気を付けてお帰りくださいますようお願い申し上げます。

本日は誠にありがとうございました。

閉 会 午後 4 時 2 0 分